

也  
五  
八  
十  
五  
十

推八條吟味之傳

元禄十五年極月廿六日御月書土尾重頼守及  
以定之御紙之御例之御方之御卷中  
稻原丹後守及土尾重頼守及秋元但馬守及  
土尾重頼守及土尾重頼守及秋元但馬守及  
其外四條八條之御卷之御卷之御卷之御卷  
御子時大石内藏之御行國御之御卷之御卷之御卷

吉田忠美の塚形と事情右云く此石舎佃川神中

守及より苗を指之附置能おん何也此字お麻布

と看し此例成此録例小此石舎稲葉丹後守及

作内神の由付るに思をい此を備らうらうに

左川と昔多陰子の力入耳く上二両子と定心

今平伏ス海と接く佃川の家安及云部

直及平伏系上付長此とより法守徳有内花

くゆや何成正年成なる志此言中上座一と

平伏是計時以是書志此日附水燈小左邊及讀

上々々々々 積ハシ流シ徳左通

一付及浅形之内通以及家来大石内燈助頭取

社大幣侍意古長上燈助が定は積系仕榎屋

及子他一本

一 御搦えを不憚礼妨及公儀ヲ不忌波方不慮  
本

一 夜中ニ忠入相傷ハ本ヲ以置絨ニ等交仕方ハ本

一 門ヲ打破リ押入ル本

一 一味同心者殺而人ニ方を圍リ中計者有ル事

立退ル本

一 内通以及家来打入ル者に指スル成也

一 夜中忠入本及大ヲ持糸を本松の成ル桃打

成ル

一 信長ノ多シトシテ本在系高家の職たる上野

了ゆ方ハ押入也トシテ働上を不忌才命不相

意の波方不也ハ本

一 長及具ヲ持糸法ヲ破ル本

一 飛及具持糸法波を不也本

一 昭物持糸殺小新衣之本

一 糸死を持は美送位仕方軍儀、道手押候

一 橙く新可成本

一 右儀後多負あは上野物未を恨ある處

一 親子書片小付應き心才心は遠く一本

一 大勢討取不仕方、上野く物家来殺

多討取り本不仕一本

一 上野く物屋浦恙く破布一本

一 連中く介く目引く者有應下可中上本

一 去年赤穂城引拂良心應る不家本有

一 大勢人々糸死本と右右く考上野く物を討

取を指し柳子赤穂退散し音尾

一 公儀小討し有言有之或不審少友あは

一 右拾八條く類中同中仕との本や

此時大石内蔵の助打し之を波江守に後  
心懸く徳平上式と伺稻葉丹後守及伴  
三十一内蔵の助江遠志中上下との作  
有り時三小笠兼佐後守及大石日向兼  
一向く一二守同石右松八三徳く徳中同  
下仕者批作有利時内蔵の助大川と  
平伏し乃志御命徳平内言ア上上と

少徳仕共時小笠兼及侍

時安海村内通以友家其大石内蔵の助以

取仕大智波流意言の上中少定上折系

仕根齋及不在内蔵の助中同助中

乃志中上下時多之内通以仇言の上及付中

徳平言乃石浦の折系仕言一取書付

是上中言書曲し徳妻用言少

下折通... 中上... 書... 曰

去年二月十日... 内... 延... 延... 延...

以... 係... 身... 上... 延... 延... 延...

之... 恨... 之... 會... 之... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

切... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

畏... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

新... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...

延... 延... 延... 延... 延... 延... 延...





少の系反

口を異ア能日利奴一ヤ

橋を極の地

何事も快君臣下市のあをハ天下一同ノ義

少々君父の仇を報て天ヲ裁つと云

云々利心方とる一付交忠言を働

復藉とのこも中され志心内通以反ハ能

家来を孫れ一ヤ

少の系反一付

中や友快の美何をを正以以々兼忽々

何一云と存するささく彼ホハ又鼎何ヤ一

内宿物其印利女ハ云校んとあとも

自かめき又鼎云云の妙志を多引せん

思一々場下出を右履きに程案の以鏡

元小柳の御縁様藉付上の鼎やあぶん  
早末をい上りて志願のりり小波前トヤ

内程物

以等P身りますす昔長法國の何室は字ハ  
何程此りや、系志仕交とP上ハ

小笠原氏

はる志水と本上世の御知り不ハ三列在田

旅と日子武百石の氏や何政も原を

内程物

抱水も系勤交代の右座の下ハ信通

中一信其ハる一当地中右と在り左

上秋家ハ法編左ありと志願と尚九月中

と上秋家小道毎ありと信身小夫うありと

と今初進と概と勢一ハ後と右一ハ

根籍仕ひの上之申入

其秋甚々くふし以撓えを憚りて根を  
暫く海に放ちしとてあそ以撓えも憚心  
の所に根籍せを天下の法ハ何多しとて  
自ら根を討ちむらうとて海にも其方  
左のふし年いふ徳也と申りの以撓えも  
根籍しぬる也國法を申せらとて  
其法もあそ申法の中をきえゆける小  
あそいといふ申也りも

アイヤ等く以請るは依後申及  
其情を去年に月述を浪治橋門に  
於小去羊肉函以上申し助一併身殺代

勅切あり池と成流石の石家路の絶去  
せりあるき世乃城回悉然小上乃号小右で  
上登り物様ありとくとも尾浦登り此仰付  
本不白院の後近及光し物上り此は移  
移り上登り物隠指有子長なる傳自家路  
此仰然り本不白院と総玉川といふも  
國邊寺物と國の物といふを以積元と

中さゆりし上舟と女えを爰渡居梯ありを採守  
し柵系ハ仕るまは只一途小以積元復籍と  
正以以希忽の一云かと存り此院の氷依守

後  
小立系殿

物と号守者小立系殿を本居初中小押入波  
同前し竹誌是いりこ

中ゆけまの初中柵系せしり欲ハ高家

居て孫と又孫家と上杉家或幼く家討殺  
後有之由慥々知仕り及禁之海人へは孫  
余へ何とそ尋友の携負及及登き方一取  
進きをや何勢人軍中にと大款に初討に  
志知下是心初討仕り然に皆備との作を  
懐きき一云をるにら別と西と討入るとも  
修海地因近以友家才者互人の妹言を

を絶んの是迄批系仕上聖く及及出と  
携負をあり多海漏と云るを及よりをいり  
打入りけ本を隣赤山吟味ひて志安おお

中一は

小宮系名御也

皆一初く火半将者をいめ一又討今初火半  
ちと唯をり隣赤山を證せ一本是既便友  
ふざ塚波乃火半とてとちや

内記の由

大津将来。出立の儀。此に扇合。延八五振合。

殺不。立生。初文。命。老。新。く。形。方。少。く。八。件。

来。能。成。ひ。及。也。形。又。押。入。の。旨。と。大。津。よ。や。う。

味。う。澄。子。あ。を。掛。り。と。物。と。く。人。の。受。と。と。延。中。を。

小。の。皆。初。が。出。然。の。作。暗。少。く。出。た。り。

少。五。系。の。由。

口。を。被。礼。令。及。年。也。何。成。櫻。籍。を。や。共。

方。後。家。老。脚。の。名。在。口。に。本。大。切。成。年。と。

不。知。や。近。以。卒。忽。と。以。話。く。早。と。云。信。同。

乃。し。仕。合。立。判。の。由。

口。被。し。女。

也。仰。表。門。と。被。り。而。中。柄。の。を。懸。ひ。を。余。就。押。

入。り。物。者。美。鳥。と。り。の。者。を。使。う。来。志。勢。在。り。

及。口。被。殺。れ。し。事。森。々。也。及。家。事。一。社。業。に。て。

部科ハ近以迷惑多クハ此

小笠原氏

陳する本あり上形物屋鋪見分者入座

互物表門破る中さ水ハ表門破る礼せ一本

の乞支利

門形物

共悔上形物及法家来る此あふ屋心と銭

押入一及孺表門の方近以迷惑

及押破法家此迎をい

小笠原氏

初討初一味者六七百一四方を固以中上

形物家来給合年馬の初討者大ハ何

立要りや右物

門形物

付後私一向右存後一味者ハ此

皆正色交上付入に及受言を後、皆見下せぬが云  
早赤い道途し者直隣家形初るそとと及何  
半かた有ん分小出ふれし者あふんか交を  
実しく中上しあのかんか懐物の般小ハさき  
も心法とるもるがぬし王以笑止る事九し  
毒あふ初成とアサ笑し  
小室正色交上  
抱るの魚及び家来ハに抱くか抱やみ万こ

小石そ出める庭中のに抱くか抱はれし  
但又に抱くか余を皆信成る命をわし  
志を忘れ進去し及に抱くか抱りし内道  
次及の形はた義成或土ハサしし及き本や  
人種大智ありを隠さんとか海川と家の恥業  
と取きたと揚るに下のあふ白を隠さんと  
とにんしとと者笑つあしつア夫笑志あふ



主人内通以不肖小兒の爲に播別并類の城を  
侍多編多き者八百余(一) 熟く殺凡さ小首余  
控大園の所を殺至一八寸交、用不足其子個  
と来春首月十日ハ内通以二回云小由とけ  
付日ハ終志と流んと申合に処小首及及十文四  
二等上枚中九情、引移りあるときく志りの  
極月十日ハ下下の名終とて、葉の陽の金也

大友近江守以下川量前守及其外、嘗て  
殺多、控上枚、石浦、出入りて、小本、六  
交と云、にて、同志、者、有、通、達、せ、る、事、也  
予、此、在、り、及、其、以、ハ、戸、有、合、世、者、大、半、り  
以、指、下、人、終、一、者、有、海、り、付、本、と、交、り、つ  
終、各、小、石、十、終、と、恨、し、は、ッ、ん、あ、れ、有、  
此、事、ハ、ハ、ハ、是、此、及、志、り、又、さ、乃、ハ、

人幣し入事一に指さるる而決山正此の事乃  
夫公有し楠正成をその時より後一々終小  
湊川に付死して也初智於大義を企せし  
後小ありに指さるる武運の時いふ者神  
懐を達し大を企しを楠正成と指しし合儀  
家の人を養ふと多し中あわらし未代の無過  
中あらん半以上は上の仕合やの學武門の真か  
しい一系系と存存りし中上ん

何れか六十年首の家系皆に長小あり其  
初打合屋一とて何人百姓をその父の初討  
之初討するありとハ奥羽右石にて百姓の  
始父の初討ありてや係小ありそその由近  
者有屋つし以定て初成者有ハ初言小思

唐の饒讓あり竹の太石形の家老も持あり  
不笈竹右無きに延意成内通以及の紀宗  
来と持水ハ果穀目出交とや云く人号  
しあき世の成日亦夜ヤ

小笠原及の守

上形(中)定ト竹時打入トそ松のを持ヤ  
桃行と持ヤ何とと持系セーヤ

内通しゆ言

折入の首ト一切火ト持系子仕

小笠原及の守

志~~者~~竹と持とあかをを用いあや

其初ト十四月終々海きくを清く  
乞~~画~~のぶりとく~~姉~~屋敷の印ハ物浦云

核に及雪のめりて月の光り比る火も一切入  
るよ又家の内も佛堂も妙し詠もくを思  
ふよ

少堂系及はる

上世の物指方と系うしや

活指方とんぬ是尋らる共所、指経を  
信くはうり奥進物かけ二階ら下録し中

其外小の道尋らる活指方下知水市一尋教  
年一母活らあ乃あことち利は急口指しけ六

是唯、あ及、室、う、肢切留んとすを人とも  
止、後切留ん本ハいとあ一今五あこ

た、常、に、尋、活、指、方、の、暖、か、ち、う、一、通、の、二、通、の、也  
同所を尋らる尋らるとすのすり利又左右に

別と晴き所ハ陸を持実入すらを持射也



切付り古所本迄是身又法華以て一付方  
所部見え先く一者一兩人所部本松南生害法進  
先中比久実持りおろす迎給らんしとあま  
後中比久実持りおろす迎給らんしとあま  
其後本所本迄は信長とて一法華系流  
高家と對し思作の行状上を志さ派牙分  
不おもて改方派科甚々とし是に中固右や

しんがし

内相と女音

右仰て信長とて高家とて對し松  
系一信長とて高家とて對し松  
と對し信長とて高家とて對し松  
長女とて信長とて高家とて對し松  
右とて信長とて高家とて對し松

といふ形も働成履きや  
ら云之君の仇を  
於て半一控座も御侍も武家のかきんとし  
儀中さん初ら言る家の正座も借居しを心  
首尾能付之七忌乃其小の首尾あり  
小和しそそ此仰は通才そ不表懸く首尾其の  
个内能く師の中そ実を相らむ馬家  
阿ろあが國をぞ阿ろあが主人の仇才そ

半有履きか右も上下の足別なく仇とのあ字  
小取のそそる一右も少も所交有履きう才命  
を所けおそそそあすしそくかの露ハ能く  
有りあへと小笠原及吾をあそ家来持才  
心かそハ天情あそ才右位ぞいそそあか  
儀能土履多そ仰右儀一島ありかあほり  
能付しそ才のそそとそ在及法の彼そ

とゆふと新にもかまふ所正の仇を執らんとす  
多利あせきく飛及身を持系波あるを  
内蔵し物言飛及具は骨く後沈地ハ持系  
不仕すら或々張又將之祝一浪不持仕り是ハ  
惣合くわふりい以上地め及万一是系く加邊  
終子時日我類を執し昔打浅しはまとな  
め及右くわふすら持系仕り

長及具持系とてとちや刀名候しと正か  
ふんそいのか候不存あるを

内蔵し物言

長及具く後と詰まし馬手是右者不持  
仕り又音家の馬と結後人も右くはひ有丈  
暫小交ふ候付浅き屋きかとな付及よ持系  
仕り



明物を困いし事一は復さる事

明物持系との仰小右殿并の由の由道中後諺の  
く教友延引仕小右こかばしくはらひ内蔵を  
ゆ福才より吉冬仕急り及大小のうらひ不令  
を守りり明物小右只一本を不奪多兒女幼  
はたかり

物も宗記持の儀も運長し仕方運後こたき  
しうらひ一撥り新小右お成仕し本をぬるたし  
いりしうらひ大ねぬり先年慶長元の新大坂  
征代し初竹末並り直之宗記取る古き外後  
在馬しゆ小右せんしと共ひし物取負の謀ト  
初討ししうらひ諸下並討入しと早田以の取し事  
と方宗記持しし免されし新かコリヤ宗記

特を逆信同本亦を懐くは、  
れを辨さんといふ罪ヲそを毛を  
早あといふ事、  
口通以存せしめ、  
わわ仕とらるる家記と持らるる  
と有きくは、  
し、  
早の信を

志水何そ家記と持らるるや

家記を持ぬと陳さるるや、家記持るるは

たる小お遠あきそ、古良の家老、  
預登しそ、  
也仰しわ仕るる、  
志と又家記を持し、  
あを

預登しそ、  
也仰しわ仕るる、  
志と又家記を持し、  
あを

也仰しわ仕るる、  
志と又家記を持し、  
あを

志と又家記を持し、  
あを

あを

付候に家記の如くは中物元身此二神道に  
御覽の御願の如くは此の如くは此の如くは  
願き下持仕り及大願成候の爲私に持たせ  
持下志はまゝとて此に申す  
左邊候事負たるとし来り又上物に物こそ  
恨める處一抱り親子徳有討候き謂水  
あり合くまゝ方心は遠

内書

也仰親子有討下下有候事言此將親  
上物に物及此持下とて心一に候相系仕候  
左邊候事負たるとし来り又上物に物こそ  
恨める處一抱り親子徳有討候き謂水  
あり合くまゝ方心は遠  
此の二方力と切のいひと持ある長力を控  
迎ふ一終子私中付書り候ハテ候とて候

ゆへに持宝の移めり長力をみ傳へれり音も  
此の由定ぬ將年一着年ぬ法をいふなり  
かゝるふいねも有恨屋より法をいふとせしむ  
追討不仕り丹後在湯名何方へ山賊は成り  
其心後い後となすなり

右之湯及後館の完ぬと見持に浦とあり

不足人形多し元因と有ありと祝と持書子  
も住城を懐しをを持歌のありは御集せん  
平頼ひるく形に人をねりあり討果は  
とと刀の汚れとも傳へく追討し功をを  
之祝不澄流石ハ内宿しゆが子初とあり集  
何事そ

門前しゆ昔今年十六才とあり成り

何十女とや何はもは夢の眼を射  
と妻子けんそく完初をを人移る  
一世人の前西が向ふる  
命を悔之徳府未誅小近邊人  
十女とく大歌を題立し  
去の奈つ十六年一付土肥の  
此を建る有又十六女是終  
を物場し法字前法くされ  
か増と有屋きんを以神  
とた極る終り法をぬか

上形し物方より死人之指  
初大勢を討取あ念り法  
る不所出と中あり

付後只今も中と通る上形し物

元之直人を大平と存せし夜お合防留は  
後之是是非計移に波日真向し批系結  
さ縁より川より面を元元野の常流の味  
比るるをわさなり可なり

屋浦被布、夜是初妨梅箱とてお是に  
そ中園ありや

是とは先程中より通表門に被入りて清地内  
道に家来之人欲と非く助成あり持扇を  
おしおしと味りし付入り及は家来より西  
阿よりありと老き戸を押破り進み路被  
を破り襖を敷し戸をけたおして庭に  
迎接し緋縁し巾小をいりし時より又井山段  
縁よりと法度付るしと夜を破りし戸

隣子の破くハ有良友の家来流ハ仕業にてハ  
と申上ハ此中一面と云ハ又其ハ

連中一ハも引業内の者ハも引業内を引  
働成るハも引業内のかも引業内也  
者ハも引業内白状せよ

連中一ハも引業内の者ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

引業内ハ引業内ハ引業内ハ引業内

是たり付交別而不皆に之を後にはたし

共方頼春シシキ後キ美村キの言を動して古開くを水

とも口と心と大いに違ひるなり去年二月十日

内匠以舟儀及之口切後家以純古を以て

仰止亦口あり一息成不骨を以て公儀を恨ん

者鶴の撫引拂の言も秘定し仰子古保を

不家安流公中才大才知杖の引後とい

とも心定小女家事ありとも新大勢人を集る

とも右小勢上莊の御討是礼を多秘くのや

とも公儀小討之款討同亦希秘選教の首尾

公儀小討し存言右や家二十上座

希秘引拂く言右を言りやとの法事別ら御

儀小討し宿言存言は此の候是教は言



同附荒本を筆の及柳系宗室女也連宗室本  
所形の上を以て先祖漢世孫西漢等

東照文正公の宗室所に在りて人宗の以て後を  
宗より正公を勅の仰と事宗上公也 正徳元年  
にけし身正を教仕を以て賢上世に助る存命に建  
行又内通以て後交減少に仕るも宗室を後政是  
る先祖宗室女白公の所も然さるるの事也 信天の

裁此の心を辨(隠便)改らるるも主人の家を  
古跡仕りて天道の真かの有無一と悟く  
合中不也七月十八日漢邦天宗の後同姓女  
流云守(正公)と成積の如神の守守正  
願祈安も中や以て後と成積の上の正正  
而一別を正上正一有り也信天正正  
只上世(正)打果一筆も和の存言も



古者國の法例とも子存存云法の家成をゆかす  
罪小法用於右屋うひはしとや西の家ク  
一門入讓の者ううと信帖見負仕天下の  
所及通うりくをサと申のた信右てハ不  
持ちれは哲人が返自かを智也壬辰兼忍お  
あしをみあされたり信帖は侍ぬ不負ひ負そ  
いふさひと信帖と書きたのひうると讀ハ

今信帖は侍ぬと云ふは大義と云せし者と國  
負はさぬあつてんやわしは家来持身ては法  
下ぬか染等と云ふを西の家来と云と云け  
り云々 忽云ハ昔や家来か家来と云は者か法は  
わし何と小笠原及見負は法してものうと云  
右はひと云ふはテサ

法はきとの作も在り何柳たはたる者た

何れも何處も交り成り方天情感心成りた志也  
有れども心を付非し所在處に其具と成りて  
あるは前度如くは固也一及心世をく又名取所  
たり又成りてあり

時後し初討の儀法と成りて及已きと成りて  
此れより成り且いころあり成りたるは有る  
初書討せしは此れと成りて一及心  
元とん

一陰 其以師 一及心 初二振一 一及心 以提

初平年以是の正月十日に討死し書きたる礼一取書  
三年二十八月に討死し書きたる礼一取書  
初討し初儀と因心の心より三年に討死し書きたる  
是ハ初年以是の正月十日に討死し書きたる礼一取書

由 其巻 陰の韻 ありけり長年

隙一門 ぬ川之節 力一極 七新 控金中にて  
和書元之ひひ一化し 鷹之威し 入あとい 早そ 移給  
楠之候おもさきりー者あり 牙武土 天下の法 提  
こそ 是地ちる 牙と 皆ささく 尾を 給ふ  
物と 右折ハス 端し 物と 法守 古きそ 竹佃川 及  
の 家 是流 内 物し 物 初そ 外の 者 連と 陽と  
る 屋しと 仰を 徳西と 尾を 古 陽し けし

氏別如之御持分利

竹内菅元